

交流・学びの場としての混住寮

—日本人学生に着目して—

比較教育社会学コース 保坂真名

International dormitories as a place of exchange and learning : A focus on Japanese Students

Mana HOSAKA

In this research, I clarify whether dormitories provide an environment where Japanese students can further their learning and develop positive human relationships. Based on the results, dormitories provided a limited place of learning for some of the Japanese students who were actively taking part in exchanges. To expand it, it is necessary to enhance the training to RA.

目次

- 1章. 問題関心
- 2章. 先行研究
- 3章. 研究設問
- 4章. 対象の寮
- 5章. 調査方法
- 6章. 分析結果
 - 6.1節 留学生と日本人学生の関係
 - 1項 限定的な相互交流
 - a 交流に無関心な日本人学生
 - b 交流に無関心な留学生
 - c イベントでの一時的交流
 - 2項 日常生活での交流
 - a あいさつや短い会話
 - b 食を通じた交流
 - c 長い時間の共有
 - 6.2節 寮での学び
 - 1項 英語への慣れ
 - 2項 個人への視点の獲得
 - 6.3節 寮での学び・交流を促進する要因と限界
 - 1項 寮の共有空間
 - a 共有キッチン
 - b その他の共有スペース
 - 2項 RAの制度
 - a 管理側のRAへのコミット
 - b RAの内向き志向
- 7章. 総合的考察
- 8. 注
- 9. 参考文献

1章. 問題関心

近年、高等教育の国際化が進む中で、留学生と日本人学生の接触機会として注目を集めているのが、留学生と日本人学生が共同生活を行う混住型の学生寮（以下「混住寮」とする）である。2014年度の文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」の審査基準の1つにも混住寮の有無が挙げられ、混住寮の新設計画が増加している（吉田 2015a）。

混住寮は、「多文化生活環境の中で、寮のコミュニティに参加し、人間関係の構築、異文化衝突を乗り越える経験などを通して学生達の主体的な学び」の場となりうる（吉田 2015a:3）ことが期待されており、また、カレッジマネジメント（2013）において、日本人学生にとって「寮内留学」を可能にする場としても注目を集めている。これらをまとめると、混住寮は寮内での人間関係の構築を通して、語学力向上や異文化理解が可能な場として、期待されていると言える。

本研究では、混住寮が、日本人学生にとって期待されている学びや人間関係が得られる環境であるのか、混住寮での学びや交流の実態を明らかにしたい。そうすることで、混住寮の意義や、今後の混住寮のあり方や教育的介入の是非などに関して検討していく手がかりを得ることができると考える。

2章. 先行研究

吉田（2015a）は、日本における混住寮の研究を以下の二種類に分類している。一つ目は、「混住寮にお

ける留学生の対人関係構築のプロセスに焦点を当てた研究」である。例えば出口・八島(2008)は、留学生自身の語りを通して、個人レベルでは日本人学生と関係構築に成功するものの、集団レベルでは違和感を感じ、最終的に日本人学生コミュニティへの不参加を表明したと結論づけた。そして、留学生と日本人学生の両者が関わっていけるような仕組みを作っていくことの重要性を指摘した。山川(2013)は、寮の「ルールの共有」「空間の共有」「時間の共有」という三つの条件が満たされた環境の中で、「留学生と日本人」から「友人同士」へとより親しい関係に変化する過程を明らかにした。山川(2016)では、寮の中で短期留学生がつくるソーシャル・ネットワークに着目し、日常生活をベースとした連続的な交流の場である寮は、他のコミュニティよりも密度の高いソーシャル・ネットワークが形成されやすいものの、そのソーシャル・ネットワークは入寮時期である九月と四月の二回でほぼ形成されることを指摘した。

上記のような、混住寮の中での留学生の対人関係構築のプロセスに着目した研究からは、留学生と日本人学生が交流を通じ、対人関係を構築していくためには、単に一緒に住むだけでは不十分であり、両者が対等に関わるような寮の環境や仕組みを作ることが重要であることが指摘できる。

二つ目は、「混住寮の教育的効果、機能に着目した研究」である。正宗(2015)は、留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に着目し、留学生にとって寮が「居場所」となるにはいくつかの段階があり、日本人のサポートや制度的な支援が必要であるとした。吉田(2015b)も、「教育目標」を設定することの重要性を指摘し、寮生活における教育効果の高まりには、「教育的介入や体系化したシステムが不可欠である」(吉田2015: 22)と指摘している。

このように、これまで蓄積されてきた混住寮の研究は、留学生の学びや適応や日本文化理解に着目したものが多く、寮で生活する日本人学生の学びに着目したものは少ない。また、留学生と日本人学生の相互交流が活発化するか否かについては、寮の制度や環境が大きな影響を持つということは指摘されているものの、交流を促進させる教育的配慮や介入がいかなるものかについて具体的に踏み込んで考察したものもほとんどない。吉田(2015b)が指摘するように、混住寮の研究自体が少なく、日本人学生と留学生の学びや、教育的意義に焦点を当てた研究はほとんどない。今後教育寮としての混住寮の在り方を検討する上で、日本人学

生の異文化理解、視野の拡大、人格形成、言語習得などは寮生活を経て、どのような変化をみせうのかといった日本人学生の学びについての視点や、留学生と日本人学生両者の異文化理解における相互性や文化的・言語的な共感の進捗の可能性を明らかにする必要があると考える。

3章. 研究設問

本研究の目的は、教育的な価値が注目されている混住寮の中での日本人学生の学びや体験、留学生との交流に着目し、混住寮が日本人学生にとって、いかなる学びが得られる環境であるのかを明らかにすることである。牧田(2013)と吉田(2015a)の先行研究と、本研究で調査対象とする寮のHPに記載された寮の目的を参考に、混住寮においては特に日本人学生の語学力・コミュニケーション能力の向上、異文化理解や相互理解の向上、幅広い対人関係や親密な異文化間の友人関係の構築が期待されていると考えたため、本研究では、以下の研究設問を立てた。

1. 混住寮において、日本人学生と留学生はどのような人間関係を築き、交流しているのか。
2. 混住寮において、日本人学生は何を学んでいるのか。(特に、語学力と異文化理解能力に着目し、分析する。)
3. 上記の交流や学びを促進、阻害している仕組み(制度的側面)は何か。

4章. 対象の寮

本研究においては、A寮(2名)、B寮(4名)、C寮(8名)の合計14名の対象者に実施したインタビューを分析する。混住寮にはさまざまな形態が存在するが(牧田2013)、A寮とB寮は大学が管轄する大学寮であり、4人で1つのリビングを共有するユニット制を採用していること、また、フロアで共通のキッチンがあるなど、寮内の環境が似ているといえる。一方、C寮は、大学寮ではなく、政府が設置した寮であり、マンションタイプとなる点や、院生が多く住む点、また、寮の目標として留学生と日本人学生の学び合いを全面に挙げているわけではなく、日本人学生はRA(Resident Assistant)¹⁾として、留学生や外国人研究者

表1 インタビュー対象者

| | 性別 | 年齢 | 学年 | RA | 留学経験の有無 | インタビュー時期 |
|----|----|----|------|----|---------|-------------------------------|
| A寮 | | | | | | |
| A1 | 女 | 23 | 修士1年 | RA | 有り | 2017/07/12 |
| A2 | 男 | 23 | 学部4年 | RA | 無し | 2017/07/19 |
| B寮 | | | | | | |
| B1 | 男 | 22 | 学部4年 | RA | 有り | 2017/08/04 グループインタビューを行った。 |
| B2 | 男 | 20 | 学部2年 | - | 無し | |
| B3 | 女 | 18 | 学部1年 | - | 無し | |
| B4 | 男 | 18 | 学部1年 | - | 無し | |
| C寮 | | | | | | |
| C1 | 男 | 26 | 修士2年 | RA | 有り | 2017/07/01 |
| C2 | 男 | 27 | 博士1年 | RA | 有り | 2017/07/05 |
| C3 | 女 | 23 | 修士2年 | RA | 有り | 2017/07/09 |
| C4 | 女 | 23 | 修士2年 | RA | 有り | 2017/07/11 |
| C5 | 男 | 23 | 修士2年 | RA | 無し | 2017/07/13 |
| C6 | 男 | 26 | 博士3年 | RA | 有り | 2017/07/15 |
| C7 | 男 | 23 | 修士2年 | RA | 無し | 2017/07/26 |
| C8 | 男 | 24 | 修士2年 | RA | 無し | 2017/08/02 |

の手助けをすることに重点が置かれている点などが、A寮、B寮と異なると言える。混住寮の多様性を考慮しつつ、混住寮の多様な学びの実態を描き出したいと考え、この3つの寮を研究対象とする。

5章. 調査方法

B大学教員からB寮RAであるB1を紹介してもらい、B1からB寮の対象者を集めた。同時に、C寮に住む留学生を通じてC1を紹介してもらった後、C1からC2～C8とA1を紹介してもらい、全ての対象者に対して半構造化インタビューを行った。注意点として、今回の調査では交流に対して積極的な日本人学生のみインタビュー調査を行っている点が挙げられる。

6章. 分析結果

6.1節 留学生と日本人学生の関係

1項 限定的な相互交流

a 交流に無関心な日本人学生

本調査ではスノーボールサンプリングを採用したこ

ともあり、交流に積極的な学生が調査対象者の中心となったものの、そもそも留学生と関係を構築しようとする意識を日本人学生が共通して持っているわけではない。

「寮の活動にあんまり興味が無いって子の方が、残念ながら、マジョリティ。」(B1)

「私は、留学生としゃべる方が多いんですけど、しゃべらない子の方が、多いかな。」(B3)

など、B寮においては、寮の中で留学生とすべての日本人学生が交流を持とうとしている訳ではないことが述べられた。

また、この傾向はA寮においても見られる。

「本当に、一部ですかね。定期的に、普通に交流できているのは、本当に一部かなって思います。」(A1)

A寮、B寮ともに留学生との交流を特徴としてPRしている寮であるものの、実際は、交流に対して積極的でない日本人学生が多く、留学生と積極的に関わっ

表 2 寮の基礎情報

ハード面

| | A寮 | B寮 | C寮 |
|--------|---|--|--|
| 居住者数 | 定員数100人（うちRAが3名） | 定員数872人（うちRAが35人名程度） | CⅠ棟：329室 CⅡ棟：296室（うちRAが約20名） |
| 留学生の国籍 | 非公開 | 非公開 | アジア81.7%，欧州6.8%，アフリカ4.1%，中南米3.2%，中近東1.7%，北米1.2%，オセアニア1.0% （平成22年12月1日の数値のため参考値） |
| 寮費 | 71,000円 | 53,000円 | 日本人学生：56,000円（CⅠ），70,000円（CⅡ） 留学生：35,000円（CⅠ），53,000円（CⅡ） |
| 居室 | 原則4人1ユニット（4個室と1リビングルーム） | 原則4人1ユニット（4個室と1リビングルーム） | 個室 |
| 共有スペース | 各階にキッチン，ランドリールーム。各ユニットにシャワールーム，トイレ，洗面，リビング。ラウンジ，集会室，大浴場，中庭。 | 各階にキッチン，シャワールーム，ランドリールーム，トイレ。2階に多目的教室，フィットネスルーム，音楽室，浴室，ラウンジ・ロビー。 | CⅠ棟：交流ラウンジ（各階），自習室，日本語研修室，茶室，調理実習室 CⅡ棟：交流ラウンジ（各階），音楽室，美術室，多目的室など |

ソフト面

| | A寮 | B寮 | C寮 |
|-------|--|--|---|
| イベント | 有り。 | 有り。ほぼ毎月。 | 有り。ほぼ毎月。 |
| プログラム | 無し | 有り | 無し |
| RAの有無 | 有り。3名。全て日本人学生 | 有り。35人程度。1人を除いて日本人学生 | 有り。20人程度。全て日本人学生 |
| 寮の目標 | A寮は，国内外の学生を受け入れ，学生寮としての機能と国際交流の場としての機能を併持つ，グローバルなトップリーダーを育む学寮です。（A寮HPより） | B寮では，日本全国・世界各地から集まった多様な価値観を持つ国際色豊かな学生たちが，共に学び生活することにより，相互理解を進め，グローバル社会で活躍するために必要となるコミュニケーション能力等を涵養するとともに，幅広い人間関係を形成することを期待しています。（B寮HPより） | なし 意義として 「C寮は，外国人学生，日本人学生，国内外の研究者が集い語らう「国際研究交流」の一拠点」との記述有り。（C寮HPより） |

（表の作成においては，山川（2016）を参考にした。）

ていこうとする日本人学生とそうでない日本人学生が二極化していることが明らかとなった。

b 交流に無関心な留学生

交流に無関心なのは，日本人学生ばかりではない。留学生の場合，必ずしも寮を選択できる訳ではなく，受け入れ機関である日本の大学側から割り当てられた寮に入居するために，そもそも交流を期待して寮に入った学生ばかりではない。

A1は、「留学生自体は、寮の感じというか、ルールとかもあまり分からずに来ているので、来てみて、こんなはずじゃなかった、っていうのが多いですね。」と述べている。また、希望して国際交流に力を入れている寮に入ったわけではないために、日本人学生との交流に重きをおかない留学生もいるという。

「キッチンにも来ない、やはりこういう留学生多いんですね。イベントにあんまり参加しない、っていう。寮は寝る場所という風に考える留学生も一定数いるので、そういう留学生に関しては、難しいかなと思いますね。みんなと、っていうのは、ちょっと難しいかもしれないですね。」(A1)

「留学生の子とかでも、そんなコミュニケーションとりたくない、っていう子がいるんですよ。基本的に自分の部屋にいた方がいい、っていう子もいますし。」(A2)

また、A2とC2は寮の建築的な問題や、イベントの参加が自主性に任されている点を指摘する。

「個室が与えられているので、そんなにこう、プライベートが侵食される感じがありませんよ。そこまでコミュニケーションをしなきゃいけない環境ではないかもしれないですね。」(A2)

「イベント来ない人は来ないです。ただ単にアパートとして、別にそんなことは求めていません、みたいな。」(C2)

このように、寮の構造上制限があり、イベントの参加が自由な環境では、留学生と日本人学生の日常的な交流が困難であると言える。C2は、「みんな、コミュニティ持っているんで、(イベントに)くるのは結局一緒の人、みたいな。やっぱり、そういうジレンマはある。」(C2)と述べる。このように、留学生をいかにイベントや寮生活に包摂するかが交流の場を作る1つの重要な要素であると言える。

c イベントでの一時的交流

B寮、C寮では、共通して、日常生活よりも、イベントの中での交流の方が多い。

「僕は自分から色々なイベント参加して、友達

作ったりして、交流を持とう、っていう気持ちがあるので、すごい現時点では充実しているかな、って思うんですけど。友達でも、全然留学生と交流しなかったり、普通に日本人だけで話したり、っていうのもあるので、全員が全員留学生と交流が出来ているか、っていうと。」(B4)

このように、積極的にイベントに参加する日本人学生は、留学生と交流を持つことが可能である。

また、イベントが交流の中心となっている傾向は、マンシオンタイプのC寮では特に顕著である。

「日常生活での交流というよりは、イベントみたいな箱を作って、その箱の中で交流することが多くなったので。(交流の頻度は) 週一、あるかないか。」(C5)

「フロアパーティーやったり、イベントがメインです。同じフロアでも、イベントに来てくれないと、全然知り合えない、っていう。」(C8)

寮では、学生同士が同じ空間や時間を長く共有することが目指されている。しかしながら、実際には、日常的な交流よりも、イベント内に限定された交流がメインとなっていることが明らかとなった。

一方で、A寮では、イベント自体もそもそも多く行われていなかった。それは、RAが3人のみと少人数であることや、新しい寮であるためにまだ寮のイベントの慣習が定まっていないこと、A寮独特の厳しいルールが原因として挙げられる。

「イベントとかも、飲酒禁止で男女が一緒にキッチンで料理することも禁止だったので、そうなると結構出来ることが限られてくるので、全体での交流は、中々難しいかな、っていう感じはあります。」(A1)

このように、寮では、日常的な異文化間交流よりも、イベントなどでの一時的な交流の方が主流であり、積極的にそのようなイベントに参加する学生は、交流の機会を得ることができる。一方で、A寮のように、寮のルールが厳しい場合、イベントを通じた交流を作ることにも困難となる場合があることが明らかとなった。

2 項 日常生活での交流

1 項では、混住寮とはいえ、留学生と日本人学生の交流が非常に限定的なものであることが明らかとなった。本調査の対象となった日本人学生は、多くが RA をやっていることもあり、寮の中で比較的熱心に留学生との交流を持とうとしている。本項では、そのような積極的に交流を持とうとしている日本人学生の寮内での日常生活の異文化間交流に焦点を当てる。

a あいさつや短い会話

イベントなどでの交流が中心となっている C 寮や、A 寮では、日常的な留学生との交流は、すれ違いざまのあいさつや短い会話が多いことが指摘された。

「いってきますとかおかえりとか、そういう日常的なものだったり。」(A 1)

「フロアパーティーにしろ、ちょっと廊下で、会って話すにしろ、その国のことを話すことが多くて、ってなると、その話自体が面白いし。長くはないですけど。最近どう、みたいなことから入って、ちょっと軽く。」(C 7)

「すれ違って話したり、キッチンで話したり。」(C 8)

このように、寮では、同じ空間に住んでいることにより、あいさつや短い会話などが頻繁になされていることが明らかとなった。A 寮は、ルール of 厳しさや寮生の人数が想定人数よりも少なくユニット全員にメンバーが入っているわけではない。また、C 寮はアパートメントタイプのために、日常生活で接触が行われにくい。そのため、日常的な交流の多くは、寮内のキッチンや廊下などの共有空間で偶然会った際にかわされる短時間の交流がメインであると言える。

b 食を通じた交流

前項では、寮の中で、廊下のすれ違い様のあいさつやキッチンなどで会った時の会話などの日常的な交流が頻繁に行われていることが明らかとなったが、そのような短い気軽な交流だけでなく、食を共有することで深い交流を持つ話も多く聞かれた。

「みんなで、料理を作ったりとか。お味噌汁とか。あと、母国からお菓子とか送られてきたら、みん

なで一緒にお菓子とか食べたり。良い機会かなと思って。絶対、B 寮じゃないとできないから。」(B 3)

「一年の時は、誕生日になったら祝おう、みたいな風潮ができて。で、去年までいた B 1 みたいな RA の方が、これくらいの高さのホットケーキ作って、みんなでひたすら食べる、みたいな。」(B 2)

留学生の母国のお菓子の共有や、日本食をみんなでやること、寮生の誕生日を祝うなど、寮内の様々な場面で食を共有することにより、留学生と日本人学生の交流がもたれていることが分かる。

「一緒にご飯食べたりとかも。あと、野菜の使い方が違うとか。ゴーヤを、種そのまま使って、それ使い方違うよっていても、これがおいしい、とかいわれたり。あとは一緒に住んでいるから、一緒に深く話せることは良いなと思います。」(C 3)

「一緒に料理作ったり、お互いの進路についてだらだら話す、みたいなところで相手の価値観が見えたりするのは、僕はそれがすごい楽しくて。」(C 5)

「キッチンは価値観の差が如実に出るというか。」(A 2)

そして、このようにキッチンを共有し、料理を一緒に作ったり、その料理を共に食べたりする中で、価値観の違いや、新たな発見を得ていることが明らかとなった。

c 長い時間の共有

寮では、同じ空間に寝泊まりしているために、前項で指摘した食事以外の場面でも、さまざまなきっかけにより、長い時間を共有しやすい。

「寮の下にコンビニがあって。じゃあコンビニ行こう、ってなって、一緒にコンビニ行って、じゃあそこらへんのベンチで一緒に飯食おうって言って、そのまま話して盛り上がり朝 5 時、とか。2 週間に 1 回くらい。留学生 2 人と日本人 6 人くらいで、宗教と道徳がどっちが先立つか、みたい

な話して。それが、朝までずっとしゃべって、みたいなこともあって。その議論,3日くらい続いて。」(B2)

「もう、オールとか、普通にしちゃう。ずっとしゃべっちゃったりとか。」(B3)

「他のユニットとか、キッチンとかに遊びにいつてて、話したりとか。」(B4)

「時々一緒にテレビを見たりだとか、っていうのもあります。ソファとテレビっていうちょっとリビングのような空間があって、そこで。」(A1)

上記で示したように、寮では、大学での授業やサークルなどと比べて、長い時間を共有する機会を得ることが比較的可能である。交流に積極的な学生にとっては、それらの機会を活用することで、深くお互いを知る関係を構築していると言える。

6.2節 寮での学び

前節では、混住寮の中での異文化間交流は限定的であること、そして、RAを中心とした交流に対し積極的な日本人学生は、日常生活の中で多様な場面で交流を作ろうとし、機会を得ていることを明らかにした。本節では、限定的ではあるものの、寮の中での異文化間交流の中で、日本人学生が獲得する学びについて着目する。

1 項 英語への慣れ

留学生の国籍が多様なC寮では、留学生とRAである日本人学生の間での使用言語が英語となっている。C寮に住む学生は、急激な語学力の向上は望めないものの、寮での英会話により、英語の使用に慣れる可能性や経験を指摘している。

「基本的にやっぱり、英語は上達しないですね。非英語ネイティブですから。むこうもそんな英語出来る訳じゃないから、一緒のレベルでやっているだけなので。アレルギーは減るでしょうけど。」(C2)

「あんまりキレイな英語を話す人ってそんなになくて。アフリカのひどい訛があったり、中国のひどい訛があったりとかで。英語力の向上って

うよりも、いろんな英語に対応するようになった力の方が強いっていうのはあります。」(C1)

また、英語だけでなく、留学生や外国人研究者との接触に対し、慣れを得た経験も聞かれた。

「海外に住んでいた時は、多分自分の方がマイノリティで、すごい厳しい体験。今は、どちらかというともマジョリティの方で、そんなにきついことはないから、急激に成長したという感覚はないんですけど、日常的に住んでいることで、慣れということがすごくでかくて。多分、最初こう、外国人とかと初めて話したりするときって、引いたりすることもあるけど、そういうのは全く無くなりました。」(C1)

「うちの寮はアフリカ人とか、あんまり馴染みない国の人がすごい多くて。そういう面では経験値上がったのかな、とは思いますがね。」(C2)

このように多様な国や地域出身の留学生や外国人研究者が住むC寮では、英語を使用することに対する抵抗感が減ることや、様々な訛や癖のある英語への対応力がつくことが示唆されたと言える。

一方で、A寮とB寮に住む学生からは、英語能力の向上を期待して入ったものの、実際の寮生活において、英語を使用する機会が想像よりも少ないといった発言が見られた。

「僕、もっと英会話あると思っていましたので。ユニット入ったら、確実に留学生がいる、ってなっていたので、よっしゃ、って思っていたら、日本語めっちゃうまくて。」(B4)

このような、英語の使用機会が想像よりも少なかったという発言は、A寮、B寮共に見られた。A寮、B寮共に、留学生の国籍の比率などは公開していないが、A大学、B大学共に留学生の出身国の上位が中国、韓国、台湾であり、A大学では留学生全体の中で63.4%となっていること、また、そもそも日本に来る留学生の割合がアジア諸国からが92.7% (JASSO平成27年度外国人留学生在籍情報調査結果)であることを考えると、寮に住む留学生の多くはアジアからの学生であり、非英語母語話者であることが考えられる。また、日本人学生が20人弱しか住んでいないC寮と比べ

ると、A寮、B寮は大学寮であるために、日本人学生の寮生も多く住んでいる。

「英語をしゃべる機会が増えるっていうのと研究が忙しくなってくるっていうので、寮に住みたい、っていうので決めました」(A 2)、「英語ですね」(B 4)など、混住寮に入寮する日本人学生の多くは、英語を日常的に使う環境を期待して寮に入っている。しかし、実際は混住寮に住む留学生のほとんどは、英語を母国語としないアジア諸国からの留学生であり、彼らの多くは、日本語や日本文化を学ぶために来日していることが予想されるために、寮の生活空間が英語の環境になりにくい。

「日常会話で英語を使うっていうことがあれば、留学体験になると思うんですけど、むしろ、今のところ、日本人が一番多くて、マジョリティなので、なんか、迎え入れているお客さんという感じがあって。」(B 1)

B 1の発言からは、混住寮において、英語の使用機会が日常的でないことがわかる。B大学には、英語で学位取得が可能な学部もあり、「韓国人は英語上手」(B 3)といったように、非英語母語話者同士でも英語でのコミュニケーションをとることは勿論可能であるが、留学生にとって日本語習得も日本留学の目的のうちの1つであることを考慮すると、留学生との接触が寮内であっても、海外と同じような英語漬けの環境にはなりにくいことが明らかとなった。

しかしながら、B寮のみに共通して、日常生活での英語使用ではなく、寮独自の大学介入の教育プログラムを通した英語使用機会についての発言が見られた。

「英語で会話したりしようっていうプログラムがあって。まあ、そういう面でも、英語を使う機会は提供しているっていうのはあります。」(B 2)

このように、大学がプログラムとして、英語での会話の機会を提供しているB寮においては、日常的な英語の使用機会が入寮前に期待していたほどではなくても、プログラムに参加することによって、英語の使用機会を得ることができるといえる。

以上をまとめると、留学生・外国人研究者の国籍に比較的ばらつきのあるC寮では、留学生と日本人学生間でのコミュニケーション言語が英語となっているために、英語への慣れは達成される可能性があるもの

の、飛躍的な語学力の向上が望める環境ではないということが明らかとなった。一方、留学生に非英語母語話者が多く、日本人も多く住むA寮、B寮では、そもそも英語を日常的に使う環境ではないと言える。英語習得を目的として入寮した日本人学生にとっては、期待と現実のギャップを埋め、英語使用機会というニーズを満たすという点において、英語のプログラムは有効であることが考えられる。

2項 個人への視点の獲得

A1, C3, B2は、寮での日常生活を通して、異文化や留学生に対して感じたことについて、以下のように話した。

「キッチンの部分の、根っこの価値観のところ、きれいの定義とか、ゴミをちゃんと分別しないとか、なんかそういうコミュニケーションのとり方だったりとかの、そういうところでの異文化交流はあるというか、知らず知らずのうちにしているのかもしれないですね。」(A 1)

「やっぱみんな価値観が違うので、パーティーにしても、めっちゃめっちゃ音楽が無いじゃん、みたいなのとか、ルールがあっても、守れなかつたりとかですかね。あとは、キッチンの使い方が、みんな汚い。でもまあ、そんなに、大規模に、喧嘩になるってことはなくて、どっちかが折れるか、ああそうなんだ、ってなることが多いと思います。逆にそれを楽しめる人が住んでいると思うので、拒まないというか、え、そんなことあったの、みたいになるので。意外とみんな、ソフトっていうか。」(C 3)

「カルチャーショックっていうよりも、なんか、別に留学生も人だな、って感じたことの方が自分は多いです。」(B 2)

上記でC 3やB 2が指摘するように、寮では、期待されているような異文化間の衝突が頻繁に起きるわけではない意見も多く見られた。

「僕思うのは、留学してくる子って、日本の文化に興味があつたりするじゃないですか。だから、決してこう、向こうの文化を、あの、いわゆる文化ですよ、教科書的な文化を、持ち込んでくる

感じはないんですよ。」(A 2)

「結局日本の寮だと、結局日本基準で。で、そこに人が入ってくるだけで。なので、さっき何回か言ったように、人を理解することはできても、文化っていう面で理解できるかっていたら、そう簡単なことじゃないです。」(B 2)

これらの語りからは、日本の混住寮に入ってくる留学生は、そもそも日本の文化に興味があり、日本社会を勉強しよう、馴染もう、という意志のある外国人であり、留学生側も、日本側のシステムに適応しようとして入ってくるために、異文化衝突は起きにくいことが考えられる。

しかし、だからといって、日本人学生は全く異文化衝突のない環境下で、異なる文化や他者についての考えを深めないわけではない。A 2は、テレビ局の取材が来た際、ディレクターから異文化交流の提示を求められ、違和感を得た経験を語った。

「一度テレビの生放送の取材を受けた時に、ディレクターさんから、朝だったんですけど、それは放送が、7:45くらいの。キッチンで、韓国料理と、まあフランス料理と、朝から。絶対ないんですけど、そういう絵が取りたいっていわれて。多分だから、そういうのを分かりやすい異文化交流っていうんだろうなって思ったんですけど、でも、それってそんなこともなくて。実際朝そんなみんな食べないし、みたいな所からはじまって。だからそれよりは、違っていうよりは、みんな結構同じ人なんだね、っていう気づきの方が大きいかもしれないですね。」(A 2)

実際に混住寮での生活を通して、カルチャーショックといった異文化体験よりも、むしろ、「留学生も同じ人間」といったように、ステレオタイプの異文化交流への反発や、「文化」や「国」という枠組みから他者を見る視点から、「個人」への注目の変化があることが明らかとなった。この点で、混住寮は多様な文化や異文化を持った他者についての学びを得られる場であるといえる。

6.3節 寮での学び・交流を促進する要因と限界

山川(2013)は、寮での交流を促進する要因として、共有空間などの寮の建築的な配慮を指摘した。本節では、学びや交流を促進・阻害する要因として、共有空間と、寮内において交流を作る役割を担うRAの制度に着目する。

1項 寮の共有空間

a 共有キッチン

6.1節では、食の共有や料理の場で、異文化間交流が起きていることが明らかとなった。このように、寮での学び・交流を促進する要因として、キッチンは注目に値する場であると言える。A寮、B寮、C寮I棟は、全てのフロアに1つの共有キッチンが設置されている。

B寮のキッチンは、「階で1つです。なので、100人くらいで使う。」(B 3)「結構広いですよ。システムキッチンみたいな。」(B 4)のものであり、キッチンだけでなくテーブルと椅子も多くおいてある。

「キッチンは会話の場所なんですよ。俺がこいつとしゃべりたって人がいたら、いよう、みたいな。それは別に留学生でも日本人でも普通に仲いい人と。関係なく。」(B 2)

「他のユニットとか、キッチンとかに遊びにいったて、話したりとか。」(B 3)

「キッチンに行けば誰かいるし。」(B 4)

と話し、筆者の「友達は、イベントで出来ますか。」という質問にも、「キッチンとかにいたら、すぐできる。」(B 1)と答えるように、B寮において、キッチンは、「そこに行けば誰かいる」集いの場であり、出会いの場となっている。このように、B寮のキッチンは、寮生同士の交流を促進する場となっていると言える。

それでは、A寮のキッチンは、交流を促進する場となっているのだろうか。A寮のキッチンは、「キッチンはフロアごとに、真ん中におきなりビングみたいな形で設置してあって、そこをまあ使いたければ使うって感じ。」(A 2)「44人で1つなので、かなり無理がある構造ではあるんですけど。」(A 1)であり、各フロアに一つあるという点で構造はB寮と同じである。しかし、A寮では、キッチンが交流の場と

なっていないことが明らかとなった。

「そこまでこう、44人で1つって分かっていると、どうせキッチンに行っても、できないっていうのは分かっているのだから、限られた人しか使わないですね。」(A 2)

「キッチン自体もおっきいですし、みんなこう、1人で食べちゃっている留学生とかもいるんですね。なので、その、キッチンが、ユニット内にあって、それを三人で使うとかの方が、もっと交流はあったと思います。」(A 1)

A 2は、「最初は使っていたんですけど、最近は汚くてちょっとあんまり使いたくないな、みたいなのところもあるので。全体的な傾向としても、入居当初は、割とまだ各々生活スタイルが出来上がっていないので、結構キッチンに滞在する人が多かったんですけど。最近では多分、日本人の子はほとんど1年生なので、サークルとか、自分の生活スタイルが出来てきて、そんなにキッチンを利用している、っていうわけではないかもしれないですね。」(A 2)と述べている。ここから、寮生それぞれに所属するコミュニティができる前はキッチンが集いや出会いの場になっていたものの、現在は固定されたメンバーだけが使っており、交流促進の場となっていないことが分かる。A寮の「アルコール禁止とか、男女で一緒に食事が出来ない、キッチンを共有で使えないとかってところがあるので。できることが制約されるんですね、お酒とか飲めないから。」(A 1)という厳しいルールもキッチンが集いの場とならない要因の1つであると考えられる。

A 1が、「みんなで使う場所って、キッチンしかないので。キッチンはまあ、みんな使うし、っていうところなんですけど、でも誰もいないとみんな使わないから。」と述べるように、唯一の共有スペースであるキッチンも、ただ設備として存在するだけでは不十分であると言える。

C寮I棟も共有キッチンが有るものの、「共同キッチンって行くのが面倒くさかったり、あの、鍋持っていくのが面倒くさかったりで、結構皿を買って部屋で料理する人もいて、中々会えない人もいます。」(C 1)と指摘するように、キッチンが有るだけで自然に集いの場になるわけではないことが明らかとなった。

また、C II棟はフロアで共有のキッチンが無い。そ

のため、C II棟では特に交流がしにくい話が聞かれた。

「C II棟は全部共同なくて全部個室なんで。別に、交流しないですね。しなくてもいいというか。別に、居住者同士みんな顔合わせないですね。自分も、把握できていないですね。かぶってないと知らないです。」(C 2)

「共用スペースがなくて、全部自分の部屋なので、全くもって他の留学生とふれあう必要性が無い。」(C 6)

これらの点を考慮すると、A寮とB寮、C寮I棟は、フロアで共有のキッチンがあるものの、集いの場となっているのはB寮のキッチンのみであり、共有キッチンがあるだけで自然に交流が促進されるわけではないことが分かった。そこには、共有する人数、ルールの厳しさ、集まりやすい雰囲気、寮生の交流への志向などの要因があることが示唆された。前節で、食の共有が異文化間交流の重要な場となっていることが示唆されたことをふまえると、キッチンを設置するだけでなく、集いやすいような空間にする配慮が重要であると言える。

b その他の共有スペース

全ての寮で、キッチン以外にも、ランドリールームやシャワールーム、ミーティングルームといった共有スペースがある。しかし、A寮とC寮では、それらの空間も集いの場となっていないわけではなかった。

「ミーティングルームは使えますけど、わざわざ行く感じでもない。多分、それぐらいの距離感なんですよ、ミーティングルームと寮生の距離感って。」(A 2)

「集う場所自体はあるんですけど、普通に生活しているルートにない。一応体育館とかまあ、ピリヤード場とかはあるんですけど、予約してそこに行かないといけなから、目的がないとそこには行かないです。」(C 1)

「C II棟特有なんですけど、留学生との交流がしにくい。で、共有スペースは一応あるんですけど、くる必要性が無かったりするので、自ずと生活リ

ズムも合わない。会いましょうっていう強制力もなかったりしますし、そこは結構苦労しているところではありますね。」(C 6)

A 2が、「コインランドリーを使ったりする時に、(留学生に) ばったり会ったりする訳じゃないですか。そういう、同じ生活インフラを使っているっていうのは、大きいかもしれないですね。交流っていう意味では。」と述べているように、洗濯などの生活上必須な場所では、使用する際にあいさつや短い会話程度の交流が起きることが予想される。しかしながら、それらの空間が相互理解を深めるような交流の場になることや、予約が必要な体育館、ミーティングルームなどの日常生活上出向く必要性の無い場所が、集いの場となるには限界があることが示唆された。

2項 RAの制度

a 管理側のRAへのコミット

RAは、留学生の生活上でのトラブルを解決することや、留学生との交流の場を作ることが期待されている。

「思ったより、交流が無い。自分たちで結構作らなきゃいけないっていう意識がありますね。きっかけ作りを日本人がやっていかなければいけないのかな、って思っています。フロアで見たら、話しかけるとか、そういう感じでしていかないとって感じです。」(C 3)

上記の語りから、C 3は、寮全体での交流の場を増やすことの必要性を感じ、日常的にも留学生と交流を作るよう努力をしていることがわかる。しかし、全ての日本人学生やRAがこのような意識を共有し、行動しているわけではない。C 2が、「日本人は交流するのが仕事で住んでいるところがあるので、しますけど。普通に住んでいる人は、住んでいるだけです。忙しいです。ね。」と語るように、RAにとっては「交流が仕事」である。しかしながら、RAの仕事自体に明確な範囲が決められているわけではなく、RAの交流づくりへの熱心さや活動へのコミットは、学生によって大きく異なる。例えば、A 2とC 5は、RAの仕事から距離を置くことにより、仕事の負担感と謝礼金とのバランスを取ろうとしている。

「割り切る精神みたいなのはついたかもしれない

ですね。別に、RAだから、って、全部やらなければいけない訳ではないし、俺にも俺の生活があるし、っていう。これは僕のスタンスですけど。できることもできないこともあるよね、っていう考えにはなりましたね。」(A 2)

「少ないなとは感じますね。感じますけど、そこを極力見合わなくて、不満だと思うのが嫌なので、謝礼を超えてがんばりすぎることを避けているので、めっちゃ低いな、とは思いません。」(C 5)

このように、RAによって、やる気や活動へのコミットに差があることが示唆された。このRAのやる気に影響を与えている1つの要因が、大学側のコミットメントの強さである。

「うちの寮は淡白っちゃ淡白かもしれないですね。今3人なんですけど、みんなやることはやってますけど、めちゃくちゃこうしなきゃ、みたいな雰囲気はないので。報告書を毎月出すじゃないですか。でも、レスポンスないんですよ。出さなきゃお金貰えないんで、出すんですけど、フィードバックみたいなものないし、暖簾に腕押しみたいな感じで。だからまあ、学事もそれくらいの温度感なら、俺らもそれくらいで、みたいな。ルール違反とか、クレームがあった時は、(学事から連絡が) すぐくるんですけど、僕たちの、こういうことやりました、みたいなことに対しては、まあそんな、ないですね。」(A 2)

A 2が指摘するように、大学側がRAや混住寮にどれほど熱心にコミットするのかも、RAの活動への熱意や方向性に差を与えられられる。RAのやる気そのものが問題というよりもむしろ、それを引き出すような大学側のかかわり方が重要であると言える。

b RAの内向き志向

20人規模のC寮のRAからは、日本人の間で非常に仲がよいことがエピソードとして多く聞かれた。C 7が「国際寮っていてもやっぱり、何か中心になってやるのは、日本人で、日本人コミュニティが協力してやらなければいけない。」(C 7)と指摘するように、寮運営の中心となる日本人学生の仲のよさは重要である。しかしながら、それは混住寮という場において、

良いことばかりではない。

「日本人RAは事務局があるんで、日本人同士はたむろしますね。電気ついてたら誰か来るし、飲んでいたら。日本人同士はたまにたむろはあります。」(C2)

「日本人だと、仲良くなっちゃいすぎて、(留学生)が中に入れない、みたいなのは、たまにあって。」(C3)

「日本人が仲良すぎるので、ちょっとコミュニティがきっちゃっているのが。」(C7)

このように、RAが日本人学生のみで組織されている場合、RAの仲が良すぎることで寮生同士の交流を作るはずのRAの組織が内向き化してしまうことや、留学生と日本人間の壁となり、異文化間交流を阻害してしまう要因となることが明らかとなった。

7章. 総合的考察

本研究の結果より、第一の設問である「混住寮において、日本人学生と留学生はどのような人間関係を築き、交流しているのか」については、以下のように答えることができる。

寮の中で、異文化間交流を熱心に行っているのは、一部の学生であることが示唆された。またその交流も、日常的なものよりも、イベントなどでの一時的な交流の方が主流であることが明らかとなった。寮での異文化間交流を活発化させるためには、交流に無関心な学生をいかに寮のイベントに包摂するかが重要であると言える。そして、積極的に交流をしている学生は、あいさつや廊下での会話から、食や長い時間を共有した深い会話など、さまざまなレベルでの交流をしていることが明らかとなった。

第二の設問である「混住寮において、日本人学生は何を学んでいるのか」については、語学力と異文化理解に着目して分析した結果、以下二点が明らかになったといえる。

第一に、外国語習得といっても、日本人学生が望んでいるのは、多くの場合英語力の向上である。しかし、混住寮に住む留学生の大多数は、非英語母語話者であるために、日常的に英語漬けになるような環境にはな

らない。また、C寮のように日本語が話せない非英語母語話者が多い場合でも、語学力向上そのものの達成は難しく、英語に対する慣れに留まることが明らかとなった。

第二に、言語以外の学びとして、「文化」や「国」という枠組みから他者を見る視点から、「個人」への注目への変化が示唆された。寮では、異文化衝突が日常的に生じていないものの、日本人学生は共有スペースの使い方などを通して、留学生の行動や価値観に違和感を覚えたり、逆に、以前抱いていたイメージとは異なる新たな発見をしていた。混住寮は、日常生活の中で多様な文化や異文化を持った他者についての違和感や新たな発見の積み重ねを通して、ステレオタイプなイメージを払拭できる可能性のある場であるといえる。

最後の研究設問である「混住寮での学びや交流を促進する仕組みは何か」については、建築的な要因とRAの制度が指摘できる。

第一に、共有キッチンがあるだけで自然に交流が促進されるわけではないことが明らかとなった。キッチンが交流の場となるか否かには、共有する人数、ルールの厳しさ、雰囲気、寮生の交流への志向などの要因が影響を与えることが示唆された。

第二に、RAの制度がRAのやる気やRAが作る交流に影響を与えていることが明らかとなった。また、混住寮と言っても、寮運営の中心となるRAの多くは日本人学生である。そのため、RA組織の日本人学生の仲が良すぎる場合、寮生同士の交流を作るはずのRA組織が内向き化することや、留学生との異文化間交流を阻害してしまい、寮全体に交流を広める上で限界があることも明らかとなった。

以上をまとめると、混住寮は交流に積極的な学生同士の異文化間交流の中で、一部の日本人学生にとっては限定的な学びの場となっているものの、その交流や学びを寮全体に広げるのは困難であると言える。

本研究の限界として、インタビュー対象者の偏りがあげられる。対象者は留学生との交流に積極的な学生が多かったため、留学生との交流をもたない日本人学生にとって、混住寮が学びの場となりうるのかは明らかにすることができなかった。したがって、一般化するには限界がある。しかし、本研究は、これまで実証的な根拠が不足したまま期待されてきた混住寮の学びに着目し、日本人学生の学びの場としての寮の実態や限界を明らかにしたという点で、意義があると考えられる。

本研究において明らかになった混住寮の課題は、RAの制度が必ずしも、寮での異文化間交流を促進するために機能していないことである。本研究の分析からは、RAの中でもRAの活動への参加態度に差があることが明らかとなった。そして、RAの意欲や態度に対し、大学のコミットメントの強さなどのRA制度が影響を与えていることが示唆された。RAによって交流の質や量、寮が学びの場となるか否かも変化する点を考慮すると、交流や学びを寮全体に広げるためには、RAへの研修・教育の充実などRA制度の改善が必要であると言える。

今後の課題として、交流の活発さを左右するRAの行動戦略や寮のハード・ソフト要因、また、RA組織に留学生がいる場合のRA活動や交流の実態を明らかにすることを提示したい。

8. 注

- 1) RAの業務は、A寮、B寮、C寮ともに、寮生の相談に乗ることや交流イベントの企画運営をすること、寮の管轄組織と連絡をとることなどである。3つの寮全て、RAは月額で謝礼金をもらう。

9. 参考文献

- 1) 出口朋美・八島智子 (2008) 「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関係学』5号, pp.33-47.
- 2) 牧田綾子 (2013) 「グローバル人材育成の場としての『国際寮』の活用」リクルートカレッジマネジメント (2013) 「特集寮内留学」『カレッジマネジメント』183, pp.6-11.
- 3) 正宗鈴香 (2015) 「寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に関する事例研究—国際寮の教育的機能の可能性—」『麗澤大学』98, pp.63-72.
- 4) 山川史 (2013) 「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38, pp.100-115.
- 5) 山川史 (2016) 「短期留学生の大学寮におけるソーシャル・ネットワーク形成—教育資源としての寮の活動」ウェブマガジン『留学交流 2016年9月号vol.66』, pp.5-20.
- 6) 吉田千春 (2015a) 「混住寮の生活では何が学ばれているのか—レジスタント・アシスタントの語りを中心に—」(第36回 異文化間教育学会発表資料)
http://www.intercultural.jp/about/excellent/2015_thesis_yoshida.pdf
- 7) 吉田千春 (2015b) 「留学生宿舎から混住型学生宿舎へ—教育寮への転換に向けて—」ウェブマガジン『留学交流 2015年8月号 vol.54』http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201509yoshidachiharu.pdf
- 8) 吉田千春 (2016) 「混住寮では何が学ばれているのか—レジスタント・アシスタントの語りを中心に—」国際日本学研究論集第4号, 2016.2, pp.1-15.

- 9) リクルートカレッジマネジメント (2013) 「特集寮内留学」『カレッジマネジメント』183, pp.4-32
- 10) JASSO 「平成27年度外国人留学生在籍情報調査」
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html (2017/08/28)
- 11) A寮HP (2018/08/28)
- 12) B寮HP (2018/08/28)
- 13) B寮レジデンスセンターHP
- 14) C寮HP (2018/08/28)
- 15) 「C寮レジデント・アシスタントの主な業務」
- 16) 「C寮留学生・研究者宿舎の管理・運営業務仕様書」

(指導教員 額賀美紗子准教授)